

2022 年全豪オープン観戦記 (2)

－世代交代をめぐる激しい戦い

男子決勝はナダルが優勝し、グランドスラム大会 21 勝目の記録を達成した。戦前の予想も私自身も、メドヴェージェフ有利と見ていた(オッズはほぼ 6 対 4 でメドヴェージェフ)。実際、ナダルは自らのサーヴィスゲームのキープに苦勞し、第 1 セット、第 2 セットとも、5 分から 10 分もかかるサーヴィスゲームの連続だった。サーヴィスゲームを簡単にキープできないと疲労感が溜まる。試合開始直後から、ナダルは吹き出す汗を拭いながら、自らのサーヴィスゲームのキープに苦勞していた。しかも、第 2 セットは 86 分も要した挙げ句、セットを失った。序盤のリードをひっくり返されたセットだけに、肉体的な疲労と精神的なダメージを考えれば、ほぼメドヴェージェフの完勝と思われた。全米オープンでジョコヴィッチを 3 セットで破ったメドヴェージェフは、ナダルも 3 セットで一蹴し、世代交代に終止符を打つ直前までたどり着いた。

ところが、である。ここからナダルが復活した。というより、メドヴェージェフのインテンシティ(強度)が下がった。ダメージを受けている相手を一気呵成に攻めれば、勝負は決まったはずである。ところが、ナダルのレベルが上がったわけではないのに、メドヴェージェフのファーストサーヴの確率が落ちただけでなく、本来の粘り強いストロークが消え、ナダルより先にミスするポイントが増えた。これにたいし、ナダルは逆に、ファーストサーヴの確率が上がり、スピードも落ちなかった。

ふつうなら疲労困憊しているはずのナダルのプレイレベルが落ち、勝負は決まったはずである。しかし、この試合ではメドヴェージェフのフィジカルコンディションが先に落ちた。どちらの選手にも疲労が溜まっていたはずだ。しかし、ナダルより 10 歳も若いメドヴェージェフの動きが、ナダルより先に悪くなった。はっきりした仕草は見せなかったが、両足の太もも辺りに痙攣を感じていたようだ。2 回にわたってメディカルタイムでマッサージを受けた。足の疲労を考えて、第 3 セット以降は、ストローク戦を早く終わらせるために、幾度となく不用意なドロップショットを使ったが、その度にナダルに切り返された。この悪い展開が繰り返された。エネルギー節約を考えた消極性が勝負を分けた。

グランドスラム大会は 3 セット先取なので、初戦から長い試合が続く。メドヴェージェフは決勝までの 6 試合で、およそ 17 時間半の時間を費やしている。とくに、5 回戦(準々決勝)の対オジー・アリアシム戦は、先に 2 セットを先取されたために、5 時間近い戦いを強いられた。次の準決勝が事実上の若手代表の決戦となった対ツイツイパス戦である。幸い、この試合は 2 時間 40 分で決着したが、決勝直前の 2 試合に要した時間は 7 時間半である。そして、決勝のナダル戦が 5 時間 24 分である。

もつとも、ナダルも決勝戦までの6試合で、ほぼ17時間を要しているから、試合時間ではほとんど差がない。にもかかわらず、ナダルのインテンシティが落ちなかったのはその驚異的で強靱な身体能力にある。この点ではジョコヴィッチも同じで、この試合は2021年全仏決勝を彷彿させる。ツイツイパス対ジョコヴィッチの戦いとなったこの決勝戦で、やはりツイツイパスが2セットを先取し、一気呵成に行くところ、逆転されてしまった。ここでも、10歳以上も若いツイツイパスが先に疲れてしまい、最終セットで足を痛めてしまった。

世代交代をエポックメイキングになったはずの決勝2試合で、ジョコヴィッチもナダルも意地を見せた。彼らがなにゆえに10年以上にもわたって世界のテニス界に君臨できたのかを見せつけた。身体能力でもパワーでも上回る若手相手に、その驚異的な身体能力とインテンシティの持続力を見せつけた。しかし、ナダルがこの先、どこまでこの厳しい戦いを続けられるかは分からない。メドヴェージェフ、ツイツイパス、ズヴェレフの三羽鳥に加え、彼らを僅差で追いかけるさらに若い手集団がいる。シャポヴァロフ(22歳、カナダ)、オジー・アリアシム(21歳、カナダ)、スィンナー(20歳、イタリア)のそれぞれは、身体能力が高く、速いサーブと粘り強いストローク力をもつ。スィンナー選手はアルペンスキー選手になる予定だったのが、テニス選手になった。世界のジャンパーとして飛躍した小林陵侑選手も、小学生時代から「岩手スーパーキッズ発掘・育成事業」選手に選ばれ、種々のスポーツでの才能を見いだされ、優れた身体能力をもつことが知られている。やはり競技を問わず、世界のトップを争う選手には並外れた身体能力が不可欠なのである。

これから10年の男子テニス界は、これらの若手選手が競う戦いになるだろう。しかも、その間に、次々と若くて身体能力の高い選手が現れてくるはずだ。この世界で競っていくためには、大谷翔平選手並みの身体能力が要求される。

グランドスラム大会では、ほぼ1日おきに、試合が組まれる。女子は2セット先取なので、バーティが決勝までの6試合に要した時間はわずか6時間で、決勝戦も1時間半弱である。女子に比べて、男子の体力的な負荷は比べものにならないほど大きい。今年の全豪では、若手の有力女子選手が軒並み早い段階で敗退したために、バーティにとって物足りない試合の連続になった。とくに見るべき試合はなかったと言って良い。しかし、バーティの一人天下ではつまらない。だからこそ、大坂選手にはもう一度復活してもらって、バーティとの戦いを繰り広げてもらいたい。女子テニス界の発展のためにも、バーティとは対照的なテニスをする大坂選手の復活が望まれる。

(注) 日本ではTsitsipas(ツイツイパス)をチチパス、Sinner(スィンナー)をシナーと表記している。印欧語のツとチ、スとシの発声の違いを無視するのが日本の慣例になっているが、日本語でもこの二つの発声は明瞭に区別される。「スシ」と「シシ」を区別しない地方もあるが、これを区別しないと意味は通じない。また、「ツチ」と「チチ」も区別しないと意味は通じない。日本では「スシ」と「シシ」を区別できない人を笑うのに、印欧語の発声でこれを区別しない発声がまかり通っている。印欧語をきちんと発音ができるかどうか

かは、たとえば Singapore の発声を聞くとよく分かる。発音の訓練を受けていない人はシンガポールと発声するが、それは「スシ」を「シシ」とするのと同じことである。スィンガポールと発声しないと理解されない。